

針葉樹會報

復刊第 14 号

1966. 8



表紙写真説明

岩壁へ向う（奥又白谷ニテ）

ミノルタ・オートコード

倉知

敬 1
200

F 8
撮影

発行日 1966年8月15日	針葉樹会報 復刊第14号	編集人 東京都府中市若松町 5-6-11 三井物産寮内 倉知敬
発行所 針葉樹会社		
印刷所 錦光社		

札幌近況

大塚武

事務机に向かい、あるいはロンドンの生活やキジ猟からうけるきまりきった単調な興奮の中で全生涯を送るのは、英國人にとって自然なことではない。多くの人々は家庭にしばりつけられていると自分から考える。が、しばしば自分で自分をしばりつけているのである。事実、心の中に旅行精神さえあれば、自分の望むとおりを行う際、邪魔になるようなものは介入させ得ないものだ。

ヤングハズバンド（石一郎訳）

「カラコルムを越えて」より

事務机に向かい、あるいはロンドンの生活やキジ猟からうけるきまりきった単調な興奮の中で全生涯を送るのは、英國人にとって自然なことではない。多くの人々は家庭にしばりつけられていると自分から考える。が、しばしば自分で自分が自分をしばりつけているのである。事実、心の中に旅行精神さえあれば、自分の望むとおりを行う際、邪魔になるようなものは介入させ得ないものだ。

その藤島さんから、五月の連休に一つ橋の連中に荷物を持ってもらつて五竜へ行くという話、七十才というのに何とカクシャクたることとあきれた次第。それに引きかえ、こちらはその頃、胃の具合が変調、レントゲン写真をとつたり、カメラを呑まされたり、さんざんいやな気持を味わされました。おかげさまでどうやら無罪放免ということになりました。

ところで、五月の連休は天氣もあまり良くなかったし、五竜の方はどうなつたことかと思っていましたが、なかなかに楽しい山行だった模様、山田君の達筆で面白く読ませてもらいました。

さて折返し、また倉知君から手紙、この次の会報に「夏山の思い山々」を書けといふ。その外何でもよろしいと書いてある。何でもよろしければ、北海道にも針葉樹会員もいるし、その方が肩がこらないので、以下札幌生活の近況でも書かせてもらうことにします。

こちらへ来て二年になりますが、昔札幌にいたことがあり北海道の山もなくに行けるところは一応登つてありますので、気持としては軽い気分で行けるのは有難いこと。ただし登り出すとそもそも行かず、これはいかんといふも思ふ次第です。望月カンちゃんが一寸前まで札幌にいましたので、もし二人が一緒だったらどういうことになつたろうと、時に思います。昔は私の方が数多く行つてたし、多分強かつたろうとも思いますが、——も

針葉樹会報の十三号が七月に入つて北海道の私の手許に配られて来ました。あけてみると、古豪新鋭に藤島の旦那、ベンちゃんのお嬢さんも加わつて、賑やかに遠見尾根を五竜まで登つたことが活字になつています。

実は、五月の連休の前に、丁度東京へ行く折がありましたが、まことに奇縁で日銀の階段のところで藤島の旦那にお目にかかりました。御存知かと思ひますが、藤島の旦那はあれで日銀の大先輩——あれでなどというとおこられるかも知れませんが、まあよろしいでしょう。

いつもカンちゃんは学生中から奥さんもちという大ハン

ディがありました。ともかくいまとなっては一年に二十回も山へ行く人にはとても敵いそうもない、おまえは若いくせにといふことで随分シゴかれる羽目になつたでしょう。

ともかく、この二年間に大雪山、十勝岳、ニセコ、手稻、無意根等に、スキーで登れる手頃な山はまた登り直してみました。大雪山の旭岳の頂上に立ったときは、北海道もなかなか広いと改めて思いました。昔越中の立山の頂上で、能登半島が地図の通りの形で見えて、反対側に富士山が見えるので、日本の巾もこれだけかと思つたことがあります。今

度大雪山の頂に立って、オホーツク海の方向、日本海の方向、太平洋の方向どちらを向いても白い陸地が延々とひろがっているのに驚きました。

さてこの頃の私の山登りは一人で行くことがよくあります。店の若い連中とも行きますが、荷物を持ってあげましょうと年寄り扱いされるのも何となく気が乗らない、さればとあって一緒の荷物ではついて行けない、山を歩くときはせめてマイペースで行こうということで、一人が多くなる次第。いつか富良野の北の峯の頂上近くで、どうみても私より十才位年長の人人が一人で悠々と登つてくるのに

会いましたが、この人も私と同じ気持ではなかったらと思つたことがあります。また、今年の二月、十勝岳へ行つて来ましたが、この時は店の連中と一緒にでしたが、そこでやはり私より年長の人が一人で来ていました。だんだん親しくなつて聞いてみると、青函連絡船の技師長で、仲間はあるのだが、一緒に休暇をとれない職場でそのため一人になつてしまつということでした。もっとも、針葉樹会の連中なら気がねも何もいりませんから、若い連中にせいぜい持つてもらつて登りたいものです。

	札幌状況	小谷部のハガキから	大塚 武(1)	望月 達夫(4)	日江井正己(5)	峰高 教通(5)	山と女房と思い出	遙かなる山	札幌状況
針葉樹会総会報告	中島 寛	倉知 敬							
アルプス行									
カラコルム遠征先遣隊報告・その1	(8)	(10)							
懇親山行のお知らせ	丸子 博之								
会費納入のお願い	小島 和人								
編集後記	山本 尚楨								
(20)	(20)	(20)	(15)						

友に喜ばれた経験があつて、堀岡御大の由緒あるハンチング、何とか探して出してやろうと、雪の中をひっかきまわしてみましたがとうとう見付からず、多分今頃灌木の枝にひつかよつて〃主〃を待っていることでしょう。

この時は、往きも帰りも堀岡さんの御宅にお邪魔になつて、奥さん、お嬢さんのお世話になりました。御馳走にあづかりました。応接間の

壁に茨木猪之吉画伯の安雲野の絵がかけてあって、小品ながら私のみるところなかなかよい感じで懐しく思いました。絵といえば、こちらで坂本直行氏とつき合いがあり、昨年山田亮三君が札幌に来たとき、丁度坂本画伯の個展があつて一緒に見ました。山田君が知床の山波が向うに見える野付半島の湿原の水彩を一点求めて行きました。いま彼の家にかゝっていることでしょう。私も坂本さんの絵が二枚になりましたので、一枚を小野君にやりました。独身の彼の部屋では若干絵が大きいとのこと、そのうちあの絵が丁度よくなることでしょう。

最近私も絵に興味を持つようになつて、雨の日曜などいっぱしの日曜画家を気取つています。そのうち個展でも聞く節はよろしく。私の絵は随分横着な描き方で、カラーのスラ

イド写真を撮って来て、それを暗い部屋でスクリーンに映し、自分の手許は明かるくしておいて、スクリーンを見ながら描いて行くという手法です。結構仕上げるのにはまる一日かかるので、退屈しのぎには持ってこいです。札幌の独身者、サッチョンという嫌な言葉がありますが、このサッチョンには程よい一日の過し方です。

さて漫筆を延々と書いて来ましたが、まだ

× × × × × × × ×

◆ お願い ◆

^住所不明の会員について^

名簿作成のため、全会員に住所、勤務先について問合せした所、再三の調査にもかかわらず、残念ながら次の三名の方々については尚判りません。もしどなたか御存知でしたら、ぜひ幹事までお知らせ願います。

横倉吟三郎（昭和8年卒）
大崎幸太郎（昭和19年卒）
渡辺幸信（昭和28年卒）

中島記

× × × × × × × × × ×

小谷部のハガキから

望月達夫

僕の手許には小谷部全助の手紙がまだかな
り沢山残っているが、その一番古いものは、
昭和八年七月二十二日の消印のある、甲斐駒
のエハガキにかかれたもので、文面は次のよ
うなものである。

暑中御見舞申上候

待望の山生活は實に愉快だつたでせう。僕も十二日夜行で南アルプスへ這入り、駒・仙丈・白峯・鳳凰の諸山を探勝致しました。風雨に降り込められたり等して、帰京したのは二十日の夜でした。大檜沢の雪渓へ迷ひ込んだりして相当苦しい体験も嘗めました。

では又、左様なら

「針葉樹」七号を引つ張り出してみると、

八年というと、僕らは予科の二年生だったが、大部分の部員が上高地周辺へ出かけたのに、

小谷部は前年秋以来、南アルプスへ強くひかれていたのか、唯一人で右の山旅に出発した。北沢小舎で曾ての名案内水石春吉と駄弁つたり、仙丈小舎で降り込みられ、ワサギの肉の味のよいのに感心したりしている。北岳から大樺池の下りで道を間違え、ブッシュをこいで大樺沢に出、沢通し広河原の小舎へ下ったらしい。彼にとっては初めての北岳であつた筈だが、後年彼が北岳バットレスに魅入られるようになつた遠因が既にあつたのかも知れない。

僕はその夏は二十日近く上高地周辺にいたが、記録をみると、穂高縦走、小槍、霞沢三本槍、潤沢行など余り稼いでもいない。体の具合が少しよくない時期だつたかも知れない。この時代は、まだ夏山でも冬山でも、スキーコンペ以外に「合宿」という言葉は使われていなかつた。部の計画と云つても、部員の主だったものが中心となつて、かなり自由に計画をたて、自分の好きな班に参加するというようなやり方で、従つて単独で出かけることもあり得たのである。

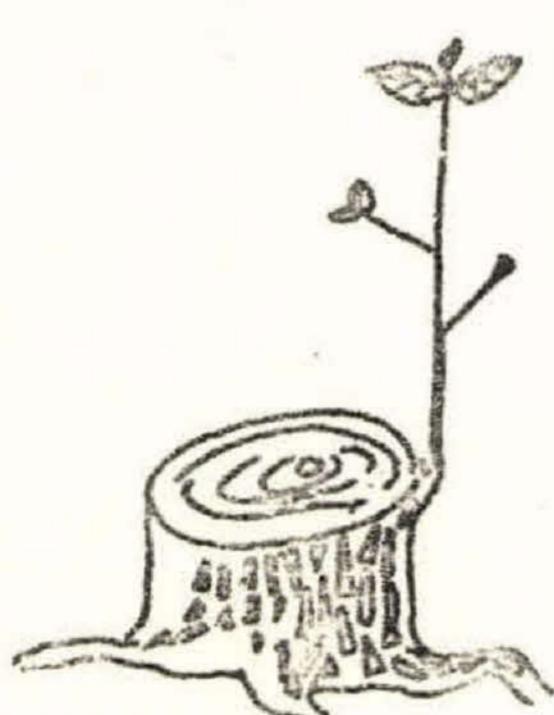
合宿形式が流行し、それでなければならぬいような風潮が行きわたつてから既に二十年以上はたつだろう。合宿の長所はたしかに認

小谷部は前年秋以来、南アルプスへ強くひかれていたのか、唯一人で右の山旅に出発した北沢小舎で曾ての名案内水石春吉と駄弁つたり、仙丈小舎で降り込みられ、ウサギの肉の味のよいのに感心したりしている。北岳から大樺池の下りで道を間違え、ブッショュをこいで大樺沢に出、沢通し広河原の小舎へ下つたらしい。彼にとつては初めての北岳であつた筈だが、後年彼が北岳バットレスに魅入られたれるようになつた遠因が既にあつたのかも知れない。

小谷部は前年秋以来、南アルプスへ強くひかれていたのか、唯一人で右の山旅に出発した。北沢小舎で曾ての名案内水石春吉と駄弁つたり、仙丈小舎で降り込みられ、ワサギの肉の味のよいのに感心したりしている。北岳から大樺池の下りで道を間違え、ブッシュをこいて大樺沢に出、沢通し広河原の小舎へ下つたらしい。彼にとっては初めての北岳であつた筈だが、後年彼が北岳バットレスに魅入られた結果が既にあつたのかも知れない。

僕はその夏は二十日近く上高地周辺にいたが、記録をみると、穂高縦走、小樽、霞沢三本槍、涸沢行など余り稼いでもいない。体の具合が少しよくなかったかも知れない。この時代は、まだ夏山でも冬山でも、スキー合宿以外に「合宿」という言葉は使われていなかつた。部の計画と云つても、部員の主だったものが中心となつて、かなり自由に計画をたて、自分の好きな班に参加するというようなやり方で、従つて単独で出かけることも現われていないことはない。「個性を喪失した登山者」などと言われるのも、そのひとつではなかろうか。

一九六三



遙かなる山々

日江井 正己

吾々捕虜を乗せた貨車は人いきれと強烈に照りつける日光でむんむんしていた。ぐったりして喋る元気もない、鉄路の単調な響が伝つて来る許りである。テキレ（最初に送られて来た鉛鉱山で中国と境を接するソ連の国境近くである）を出発してから早や二日を経過していた。

トルックシップ鉄道の本線に出る迄は日本の気候に似たこの地方は、穏りも豊かで沿線の小駅に停車する度に歩哨の眼を盗んでは畠にもぐり込み、モロコシ、トマト、キウリ等の御馳走にありついたが、一度本線に入ると草原と半砂漠が果てしなく広がり、侵小な植物の生育しか許さぬ厳しい自然の姿を目のあたり見せつけられた。「中央アジアの草原にて」という音楽で想像していた様な詩的なものでは全然なく、鈴を鳴らし乍ら、来り去る隊商の群も見当らない。九月というのに既に本年の生命を終えた草が黄色に続いていた。

ある小駅に着いた時、水汲みの許可が出たので急いで飛び降りた。私には秘かな期待があった、きっと天山の山々が見えるだろうと。捕われの身を忘れて水汲み場から離れて雨の方を仰いだ、しかし何も見えない。少々がっかりして天を仰いだ時中空高く懸って白いものが見える……おや、あゝ山だ、いや目の錯覚じやないか……矢張りそうだ、私の想像を越えたあまりにも高い山だった。

裾野は煙霧に霞み、そのため高さが際立っている。神々しい姿に吾を忘れて立ちつくしていた。テキレに居た時、偶々野草採りに行かせられ、収容所の背後の山に登った折、遙かに雪を載いた山々を見、吾々は天山の支脈の中に居るに違いないという確信を得、アルマタに行く途中必ず天山が眺められる事を期待していた。今それが充されたのだ。

その翌日吾々は路渡いアルマタに着いた。随分この町の事を山で聴いた事だろう、それはテキレの鉱山に比較したら楽園だった。市民は親切だし、収容所は清潔だし、食物は良かつたし、何もかも最高級？だった。御蔭ですっかりやせ衰えていた身体も急に快復し、笑いの一つも出る様になつた。

この町には僅が三ヶ月位で又他所に送られ

たが、作業場の近くを良く若者達がリュックにピッケルを持って行くのを見かけて、平和の有難さを沢々と痛感し、自分も何時、あゝやってまた山へ行けるか、思わず居られなかつた。

追記——帰國後調べて見るとテ

キレ鉱山は予想通り天山の支脈の中にある、天山北路に意外に近い事も知つた。この鉱山もそここの労働者の話では中国人が拓いたものらしいし、坑内には中国人の残した採掘場や、山裾では古鏡も発見されていると

いう。又、アルマタはカザヒ共和国の首都、カザヒ人は日本人の様に色の黄色い人の中に居るに違いないという確信を得、アルマタに行く途中必ず天山が眺められる事を期待していた。今それが充されたのだ。

この町にはドンガンといつて、中国人であり乍らすっかり中國語を忘れた人々が居り、この町にはドンガンといつて、中国人であり乍らすっかり中國語を忘れた人々が居り、

山と女房と思ひ出

峰高教通

嫁さんがきてまだ十四カ月過ぎたばかりである。

だから今は、嫁さんの料理を山で思い出せば、アルプスであれ、下山したくなるだろう。学生時代の合宿、特に夏山の災害救助法発令寸前の如き餌を思い出すとなお更である。

それに、十二月に入るとヒノエウマッ子の親父になることになっている。

といった状況に今夏はあるので、夏山（勿論まだ現役並に若いつもりなので、アルプス登山の意味で、それも岩登りが入らなければフルコースにならない）は遠慮せざるを得ない。夏の休暇は取っても女房のお供で東京で過ごすことになるので、在京の皆さん夏山を耳で経験する他ない。

さて、そういう状況の中だから、わが山の思い出を語る山道具も、女房の発言権が日増しに強まるにつれて姿を隠し、消えて行く。家庭の整理学ナンゾ新聞に長期にわたつ

て書かれているのもシャクの種で、山用の衣類、道具などは結構なテーマになるらしい。

母校の部室の匂い、テントの中の匂いが、独立時代には会社の寮の部屋や下宿の部屋に漂っていたのだが（実際三ツ道具が壁にぶら下がってさえいた）、今は大切な匂いも柳こうり二ヶに密封状態にされて（密封というのは山の匂いを保存するための対策であり、かつ人によつては単なるくさみでしかない匂いを外に洩らさないためである）、かろうじて保存されている始末である。

本人は、大人からみれば何でもない品物を、子供が大切に仕舞っているのと同じ気持ちでいるのだが、ぼくの好きなその匂いをこうりの中から出して身につけると、女房は「勘弁して……」という（それじやあアルプスに行く時或は帰りに、たまたま汽車で隣合わせに座ったただの乗客と少くも違わないでしょう）。おまけに結婚当初など女房がつれてき

たコリー犬まで吠えたてさえしたのだ（現在は仲よく山をかけ廻っているが）。衣類も、冬山で愛用した厚手のパッチなど肩屋が持つていってしまった。こっちはヒマラヤに持つていくつもりでいたのに。また、会社に入った年に小峰と共同で買ったワインバー型テントも結婚資金に変った。

に、六十米の垂壁に取り組んだのだ。所が、子供の頃から山で何回も経験した、涙を流さんばかりの体験以上に、いや、想像をはるかにこえて、ぼくは蜂にやられ、ミッテルの小峰の友人は、携行したアンモニアを使い切り、からだが火事だと炎天の下でわめきながら何キロも走って医者にかけ込む始末。

一方、小峰はザイルの回収に命を懸けて下降し（本人の言）、あげくは友人の母親に一生頭が上がらない、という話である。

さて、後者の方は、先輩との失敗談で、既にこの方には、冬山でデポすべき約十キログラムの荷を（ぼくはザックから出した筈なのに、従って彼のザックはデポ地点から帰る時空っぽになつていなければならぬのに）、また担いで帰ってしまったという前歴があるだけに、この時からこういうめぐり合わせになっていたのかも知れない。

更に夏山といえば、仙台に転勤になつた時、飯豊連峰縦走の楽しみ（白馬に匹敵する大雪渓、人間の少ないこと、高山植物の美事な群広大で流麗な山並、それに単独行）を味わつたが、ここでも、蜂ではなかつたが、缶ビールをあけそこなつて全身にあわをあびた途端に虻の類の群に追い廻わされ、テントを張つ

て避難するまで散々なメにあった。

さて、とりとめない思い出話はこの辺にして、再び近況報告に戻りたい。

わが家から関西のロッククライマーの道場の一つになつてゐる仁川渓谷へは、ぼくのルートをたどるならば、三十分もかからない。

道路一つ隔てた関西学院のキャンパスを横切り、仁川渓谷入口の流れを飛び石伝いに飛び渡り、ぼくが関西を留守にしている間に山を削りとつて造成された分譲住宅地の風雨に浸された石垣を何段と登り越え（どこかで家宅侵入罪を犯しているかも知れない。こんなことをするのも余りの変貌に呆れかえったことが発作の動機になつてゐるのでしよう）渓谷上部の松林の中に飛び込むと、突然眼前が空間となつて思わず足がすくむ思いがする。足下は垂直ないしオーバーハングの岩壁で、眼の下に見えるのは溪流と緑である。まだ会社が終つて一時間半しか経つていない。仁川渓谷は両岸の山腹或は溪流を遡行して三十分程度で終る規模に過ぎないが、ぼくの立つている場所からだけは、極めて雄大な渓谷という感じがする景観である。高度感はすばらしく、山男の心をときめかす。

ぼくはそこで、購入してから七年目だがそ

て避難するまで散々なメにあった。

さて、とりとめない思い出話はこの辺にして、再び近況報告に戻りたい。

わが家から関西のロッククライマーの道場の木にビレイしておいて思い切り高く遠く空間に輪を描かせて投げ、岩登りに反対する女房の言葉を思いながら下降するのである（これは一ヶ月前ぐらいから始めた）。

高さ二十米、巾二十米程度の岩壁だが、垂直ありオーバーハングあり、バットレスありで、下降方法も様々である。何回下降しても、心がときめくことは変りない。着地すると壁を見上げ埋込みボルトの列を見て追うのだが、これまでのところは登つたことがない。しかし岩に対する感覚も取り戻せたようだし、壁のひそめている危険性もほど見当がついたのでここらでぼつぼつ部室前の松の木を単独登峯した経験を頼りに登つてやろうと、これも購入して七年経つてばねの動きがもどかしくなつてゐるカラビナとアブミを柳こうりの中から取り出す日を頭の中で描いてゐる。岩場は規模はそう变らないがこの奥にも沢山ありささやかに楽しむつもりである。暗くなると一千万ドルの夜景（いつのまにか百万ドルから値上げされた）の三分の一くらいを楽しみ

つツビールをラッパ飲みしながら心を浮かせて下山するのである。又暑い日には白糸の滝をなし、好天の時はすがすがしい虹を見せてくれるダム（高さ二十メートル）の前面を、これも夏山で暴風雨のための横尾本谷の丸木橋が流れ、チロリアンブリッジで脱出した経験を、

針葉樹会総会報告

去る六月十五日（水）、如水会館にて、本年度（一九六六年）度総会が催され、和氣あいあいの内に、本年度の行事予定などをはじめ、次の様なことが話し合われ、取り決められました。連絡不行届などもあて、出席者はそれ程多い方ではありませんでしたが、最後まで熱心な意見の交換あり、特に学生とOBの交流のあり方などについては、今迄にななった熱のこもった討議が行なわれ、大いに意気上りました。これについては、いずれ他にまとまった形で報告したいと思います。

尚、これに先立ち、六月六日（月）には如水会館にて中川会長の出席の下、評議員会が開かれ、この総会にかけられた議題に関しらかじめ充分な検討がなされました。この内容については総会と重複しますので省略させていただきます。

出席者	中川 孫一・五十嵐 数馬
吉沢 一郎・村尾 金二・増山清太郎	
奥野 厳根・吉田 義則・高崎 治郎	
山本健一郎・甘利 仁朗・柴崎 新	
沢木 一夫・渡辺 嘉佑・丸子 博之	
宮城 賢三・中川 濟夫・中島 寛	
石 弘光・大賀 二郎・山本 尚穂	
高橋 信成・倉知 敬・蛭川 隆夫	
佐藤 長沢 道彦・小島 和人・高崎 俊平	
之敏・佐藤 久尚・原 博貞	

一九六六年度針葉樹会総会議事録

日 時	一九六六年六月十五日（水）午後六時半～九時
場 所	如水会館南北日本間

二、一九六五年度会計報告（高橋）

既送決算書のとおり。会計担当幹事の報告にひき続き、村尾監事から「その正確なことを認承する」という監査報告があり、満場一致で承認された。

三、新旧幹事交代

六五年度の幹事団、中村（幹事長）・渡辺（総務）・奥野（山行）・高橋（会計）・蛭川（会報）に代って、六六年度幹事団は、岡垣（幹事長）・中島（総務）・山本（会計）・倉知（会報）・小島（山行）以上五名の新幹事が指名、承認された。（旧幹事同様、会員諸兄の御支援御鞭撻を願います。）

四、一九六六年度予算および活動方針

山本新会計担当幹事より予算案が提出さ

今度は涼を求めるために活用してやろうかなとも考えたりしている。

こんなふうにしてささやかに楽しみ、ぼくの童心を衰えさせてしまわないよう努めている次第である。

中 島 寛

平川 紹男。以上三十名、委任状六五名
計九五名で総会成立。他に学生数名出席。

議 事

一、一九六五年度活動報告（渡辺）

年四回の予定の山行が一回、年四回発行目標の会報が二回と不満足な結果に終ってしまい、遺憾である。今年度は、心機一軒、新しい幹事の活動に期待したいといふ趣旨の報告があった。

れ、若干の質疑の後、承認を受けた。（本年度予算は既送のとおり）

今年度活動方針の大要是次のとおり。

① 山行の充実

山を通じて会員相互の親睦をはかるためには、回数を多くすることと山行のバラエティを豊富にすることが必要であると考え、スキー、岩登り、雪山、季節に応じたハイキング等年六回を計画している。

② 会報年六回の発行

針葉樹会のコミュニケーションの中心が会報であることはいうまでもないが、從来、その発行が途絶えがちであった。

しかし、今年度は幹事の「首をかけて」年六回発行の布石を確立したい。（この点については、多くの議論が集中し、さまざまのアドバイスがなされた。幹事一同はりきっているので原稿その他、会員各位の御協力をお願ひいたします。）

③ 財政基盤の確立

針葉樹会の収入はすべて会費によつているが、昨年度は理論収入の五六%ときわめて低率である。これでは十分な活動を行なっていくことはできないので、今年

度は会費徴収に全力をあげたい。（別項「会費納入のお願い」参照）

この点については、①銀行口座の開設その他納入の便宣をはかるとともに、学生に頼らずに自力で集める体制をつくること。②単に山小屋を建てるとか遠征隊派遣するとかの直接的な費用にあてるのではなく、もっと長期的な観点から有意義な活動を行なっていくために、会則にもある針葉樹会としての「ファンド」を設立するよう検討してほしい。との二つの意見が述べられた。

五、都岳連への加盟問題

本年二月、山岳団体の全国組織として日本山岳協会が再発足し、現在、組織化を進めている。日本山岳協会は、日本体育協会の傘下に属する一団体で、各地域別に全国の山岳団体を総合するものである。（東京の場合は、東京都山岳連盟・都岳連と略）

そこで、從来、日本山岳会の学生部に属して外部とのつながりをもっていた一橋山岳部は、当面、他の大学や団体との組織的な関係を保っていくためには都岳連に加盟する必要が生じてきた。一方、今後、日本山岳協会が、登山技術の普及、指導、遭難

対策、海外登山、情報センターといったあらゆる面で日本登山界の中心機関になっていくであろう趨勢から考えて、針葉樹会としても都岳連に加盟したい旨、幹事より提案があった。

これについては、日本山岳会のような在來の組織も、個別の団体をどのように形で新組織に統合させていくか明瞭な結論を出していない段階もあり、加盟することについてのみ承認を受け、加盟の時期と方法については、あらためて評議員会で最終結論を出すことになった。

参考

第二条（目的） 本連盟は、登山道義の昂揚並びに登山の研究、指導及び普及を図り、あわせて加盟団体相互の親睦、扶助及び連絡を図ることによつて登山の発展に寄与することを目的とする。

第四条（事業） 本連盟は、第二条の目的達成するため、次の事業を行う。

- 一、山岳自然及び登山施設の愛護
- 二、研究会、講習会等各種の集会
- 三、加盟団体の協力による各種の登山
- 四、遭難の予防及び対策
- 五、公共機関との連絡及び資料の収集

六、機関誌その他関係出版物の発行

七、その他目的を達成するためには必要な

事業

第二十二条（加盟金） 本連盟の加盟金は

金壱千円とする。

第二十三条（分担金） 本連盟の分担金は、一ヶ年參千円とする。分担金は毎年十月三十一日までに納入しなければならない。

六、その他

① 高崎氏評議員辞任

一年半の間、評議員および評議員会議長として針葉樹会の発展のために活躍された高崎治郎氏は、この度、サンフランシスコに転任のため、辞任され、評議員会議長の後任には大賀二郎氏が就いた。

② 一橋山岳部の会計について

一橋山岳部の会計が、形式に流れ、部活動の方向を卒直に反映したものになつていいないという発言があり、今後は、幹事会としても、一橋山岳部と緊密な連絡をとり、アドバイスを与えていくことになった。

パチパチと音を立てて、炎が燃え上る。やっと、このしめった戸板の残骸は燃えてくれた。相棒の顔が赤く浮び出て、何となく気分を落着かせてくれる。けむりに痛めつけられたはれぼつた目が静かに笑っている。最後に残つたグリーンピースのカンヅメを暖めて、それでボソボソになつたパンと一緒に流し込む。無言、時々こわれかけの窓が風に鳴る。

一九六五年七月、フランス・シャモニーで行なわれた「国際アルピニスト集会」に、ぼくは、日大の君島久登氏と共に招待された。いや、正確にいうと、日本山岳会の東京支部委員をやっていたぼく達二人は、フランス山岳会より日本山岳会へ来た招待に

一九六五年七月、フランス・シャモニーで行なわれた「国際アルピニスト集会」に、ぼくは、日大の君島久登氏と共に招待された。いや、正確にいうと、日本山岳会の東京支部委員をやっていたぼく達二人は、フランス山岳会より日本山岳会へ来た招待に

ここはエギュ・ド・ミディのコルにある避難小屋。ミディの頂上までケーブルが出来てからは、打捨てられてこわれかかったままの半分雪にうまつた廃屋である。今日は君島氏と二人、モン・モディのブレンバ梭をやって來た所。氷河の下りに疲れはてて、もう一時

ここはエギュ・ド・ミディのコルにある避難小屋。ミディの頂上までケーブルが出来てからは、打捨てられてこわれかかったままの半分雪にうまつた廃屋である。今日は君島氏と二人、モン・モディのブレンバ梭をやって來た所。氷河の下りに疲れはてて、もう一時

間もミディ南壁の下を回り込めば着くはずの、ケーブルの駅まで行く元気もなく、この小屋にころがり込んでしまったのだ。

最後のパンのかけらを食べ終つてしまふと、キーエンス学校に集まつて交歓と親善の登山や話をしている。先刻小屋のすみで見付けた、古び

アルプス行

倉知敬

たシートをかわかして、あとはこれをひっかぶつて横になるだけだ……。

利があります。我々は決して君達の楽しみを邪魔するつもりはありません。このアルピニスト集会を構成するのは他ならぬ君達なのであります。あとは君達にすべてまかせますから、自由にやって下さい。我々はただこれから君達に充分な食料と便宜を与えることを、保証するだけです。」

開会式の冒頭にジャン・フランコ校長はこう云った。フランスからはテレイ、コンタミン、ボレーヴィヤール、パイヨ等のガイドが参加する。ヨーロッパの殆どの国、ソ連、南マ連邦、遠くはメキシコ、日本等々、様々な顔がそろっている。

ぼくらはイギリスから来た二人と同室する。トム・ペティとクリス・ボニングトン。どちらもヒマラヤ、カラコルムで活躍している、そういうたる連中である。

「俺はトム、奴はクリス、よろしく」と、ゴタゴタした大量の登攀道具をかかえて、元気よく彼らが入って来た時には、正直なところ、一寸度肝をぬかれて、極東からやつて来た小柄な二人は、遠く異国でもまれるこれからの夏休みを、期待と不安に胸さわがせて迎えたのだった。

はじめはやっぱり、氷河に慣れないといけ

ないナ、と話し合って、ぼくらはシャモニーに着くやすぐボソンの氷河に入つてみた。モンブランの西面に急なその舌端を落している広大なこの氷河は、シャモニーから見上げると、真正面に望まれ、昔からモンブランへの一般ルートとして、よく知られている。

日中、氷河の中を歩く愚は知りながら、あえてくさった雪の中にとびこんだ結果は、あまり芳しいものではなかったが、いい勉強になつた。朝、まだ早い内は、快適にアイゼンがきいて、朝のすんだ空氣の中、気持よい登高が楽しめるのだが、陽が昇るにつれ、氷河は灼熱の地獄と化す。ヒザまでもぐるしめつた雪に足をとられ、クレバスをさけつつ、一歩々々かせいで、氷河の取付から三時間程でやつとグラン・ミュレの小屋にたどりつく。折りからモンブランから下山の一行程も、クレ

バスの陰から現われて、小屋にやつて来た。小屋の屋根に登つて、上をあおぐと、連中のトレースが一條、クレバスをぬつて続いているのが見える。はるか上のプラトーが、ここまで帰れ、と強く念を押しながらサインしてくれた。ソレツと小踊りしてぼくらは部屋にもどり、小学生の初めての遠足のようにはしゃぎながらアレヤコレヤと用意する。どうも靴が合わないといって君島氏は、道具屋まで駆けていき、新しいのを買って来る。ぼくは食糧倉庫へ行つて両手にいっぱいの食糧をもらつてくる。長いパンをな

それは唯一のものとなつてしまつたが）、ぼくらはブレンバのアレートを登ることにスケジュールの頂上はなるべく早く踏みたいと、モンブランの頂上を登つて調子も見てみたい。二日半の予定、ミディとモンブランの稜線の中間にあるモン・モデイへ、その東西の急峻な雪と岩のアレートをたどつて登り、その後モンブランへ縦走、ボソン氷河を下る。

んとかザックにつめ込んで出発。

学校のすぐ裏手から出る、エギュ・ド・ミディ行のケーブルにのると、アツという間にぼくらは標高三八〇〇米のミディの頂上に立っている。トンネルをくぐって氷の穴から外へとび出ると、もう白銀の世界だ。ガヤガヤといかにもしまりのない様子の観光客は、いすこも同じだ。彼らをしり目に、さっさと雪稜を下って、ヴァレ・ブランシユに入る。

「イヤッホー、バンザイ、」

君サンが奇声を上げる。一寸オーバーだが、いかにもそろ大声を上げたくなる雰囲気だ。広大なこのヴァレ・ブランシユに入ひとりっこ見えぬ。紺碧の空、白い雪、黒い岩、コントラスとの強い明るい山容ノオ、夢にまでみたアルプスよ、という訳だ。

これから、このヴァレ・ブランシユを一気に横断して、ジュアン氷河からモディの園谷に入り、フルシェの避難小屋に行くのだ。ガイド・ブックだと約三時間というこの行程、午後三時にケーブルの駅を出発して、夕方に着くつもりで出掛ける。

ミディの南壁の下を回り込んで、谷の真中へ出ようとすると、突然、背後で、遠く声がする。それも確かに日本語だぞ、「——イイ

カー」、「ヒッパレー、イクゾー！」

南壁からであった。見上げると、かなり上方に、五、六人少々な人影がつながって、今ラストが苦闘中らしい。「ガンパレー」と何やら話し合っていたが、やがて「こちらは名古屋の加藤、君等は誰だ？」……彼等は全岳連のパーティだった。

二、三言葉を交したあと、お互の健闘をいのって別れ、ぼくらは広大な谷をどんどん下る。

例によつて足はもぐるが、高所のせいか、それ程でもない。グロ・ロニヨンのコルを越える所で二人連れが追いついて来たが、彼等は学校の仲間、ポーランドの二人だった。やはりフルシェの小屋へ行くという。ゆっくりやすんでいるぼくらをしり目に、さんざ写真をつたとかと思うと、さっさと先に行ってしまった。

左手には、彼の有名なグラン・カピュサンの岩峰が見える。夕暮れに明暗がはつきりしないせいか、案外小さい感じで考えていた程感動することもなかつた。それだけ、回りの山々がスケールが大きいのだろうか。フルシェの小屋は左手稜線上にあるはずなのだが、どこを見ても急峻な壁で、どこから登るのか見当がつかないまゝ、トボトボ奥の方へ歩いていくと、やがて思いもかけぬ急の雪壁に一筋、トレースがついているのを見つけ、アツと驚く。よく見ると、上方を、二人、登っているのが判つた。

それが馬鹿に小さく見えるので又驚く。壁の下には、ベルグシュルンドが口を開いていたが、うまくこれは三〇センチ位に

が行く手をさえざる。トレースはこのクレバス群を、ずっと左側へ回り込み、谷の左端のツール・ロンドのふもとを行つてゐる。

その向うは谷がせばまり、まわりは鋭く切り立つて、袋小路のようだ。夕暮れと共にガスが湧き出して、行方は定かに見えぬ。雪は表面だけパリパリに凍つて、歩くと変な音がする。少し心細い気持のまま、豆粒のようすに先方に見えるポーランド組を追つて行く。

せばまた所で越える。だが、始めから傾斜はかなり急で、先行ペーティの落す氷のカケラが、すごい音をたてて落ちかかってくるのでイヤな感じだ。

四〇分、一心不乱に奮闘、これを登り切つたが、ステップが切ってなかつたら、これは相当苦闘しただろう。ブリキのドームのフルシエの小屋は、やせたその岩稜の陰にひっかかつたように建っていた。

文字通りひっかかるつて、足元からブレンバの氷河まで、stonと切れ落ちている。そのいかにもアルプスの山小屋のイメージにぴったりしたたずまいに、ぼくらはすっかりうれしくなってしまった。

小屋の中には、例のポーランド人二人の他に、やはり学校のイタリヤとユーロの二人組ともう一組の二人連れ、彼等はトリノ小屋の方からやって来たそうだ。皆、ブレンバの側稜の方へ行くらしい。小屋は六人入るともう満員だったが、毛布をわけてもらってゴソゴソともぐり込む。寝る前に小屋から出てながめたブレンバ氷河は、雲海の上、満月に照された。トレインの岩峰が背後に光つてそびえ、まことにすばらしい光景だった。

明けて七月一四日、雲は多いがますますの

天気。六時出発する。大きな岩がかさなったような鋭い岩稜を、どんどん攀ぢる。両側は氷河の底まで切れ落ち、非常にすつきりした感じ。

と、突然、ブルルル……という空気をふるわす重い音。ヘリコプターだな、とすぐわかるが、とっさにどこに居るか姿が見えない。よく探して見ると、丸で蚊のように少さのが、きのう通った圓谷の、ツール・ロンドの

ふもとにとまっていた。中から人間が三人とリコで御出勤とは流石は本場アルプスだ。さて、やせた岩稜は小一時間も行くと、でかい岩峰にぶつかる。これは左の雪の広いルンゼが樂そうなのでためらわずそれを登る。トは更に左手の岩稜につづく。岩はあくまで堅く気持ちいいが、アイゼンが邪魔なのでは

らずしてしまう。岩稜がつくると、上は右に急な雪稜がつづいて、この巨大な岩峰の頂に向つている。

ここで初めての休憩。左手には、トレインからブレンバの側稜にわたる巨大な岩壁群が一手にせまる。ものすごい圧倒感だ。一体、これが登れるのかね、と話し合い、タメ息を

つく。

そうする内に、殆どだしぬけに、さつと霧があたりを包む。さあこうなるともう急がなくてはならない。だが陽が照つたせいで、グズグズにもぐる不安定な雪は、気がせいいる程、行進を邪魔するようだし、もう高度も四〇〇〇米近くなって、気圧の影響は徐々に現われてくる。ゼイゼイあえぎながらヤセ尾根を行くと、巨大な岩峰が行手をさえぎる。ガイドブックに、垂直なクラックがあつて難しい、と書かれている、ジャンダルムらしい。そこで、イギリス人が借りて来たガイドブックをとり出して、その霧に見えかくれしているジャンダルムと照らし合せ、ルートを探す。どうもこういう場合外國語だと何となくぴつたりしない感じで、いかにも頼りないが、しようがない。

ぼくはまず、右のフェースから、これに取付、上部で左へ戻ることにして登り出す。ところが、もう出だしでうまく行かない。そこで、ここでも又アイゼンをはずして身軽になつて試みる。今度はうまく行った。あとは盾を積み重ねたようなフェースをどんどん登つて岩角でビレイ。トップ交

代。次のクラックは、君さんが右のフェースを登る。下から見ると、体を横にして丸でねそべってしまうような風にして登り切った。時間といふこの行程、初めはそんなにからぼくはクラックに入つて直上。上方に行くと空間にとび出す様で面白い。

これに似た所を以前登ったような気がしてよく考えてみたら、不帰三峰の尾根にこんなクラックがあつたことを思い出した。そういえば、寸度この尾根、あれを長大にしたような感じでよく似ている。

あとは少し左へトラバースすれば、頭へ出る。そこから懸垂。空中にぶらさがつて三〇メートル下りると、又その下は垂直な五メートルの雪壁。ブツブツいいながら苦労してピトンを打ち、短い懸垂。つづいて紙のようなナイフリッジがつづく。

次々と出てくる岩や雪の急崖に半ばうんざりしながら、カスの中、我々は登りつづける。四〇〇〇メートルは越えたのである。疲れがひどくやたらに足をとられる感じだ。肩で大きな息をしながら、下の相棒やいかに、と股の間から見下ろすと、頭を雪面につけていかにも苦しそうにへばりついている。これを見て、二人ともこれではもうモンブラン登頂は無理だな、とあきらめる気になつた。土台、いき

なり四千メートルのヴァリエーションで、長時間

小屋にたどりついたのだった。

行動はつらいのは当然。ガイドブックでは十ないサ、とタカをくくっていたが、結構それ位はかかってしまった。

午後三時、モンブランの主稜線の高さまで出たので右へトラバースし、モンブラン・ド・タキユルのコルへ向う。急な雪渓を斜めに下りて、ラントクルフトを違い目の所でうまく越し、やっと安全地帯へ抜けた。

ところが、ホツとするのもつかの間、黒雲が襲ってきて、だしぬけに大粒のアラレが降り出した。あわててモンブラン・ド・タキユルへ登り、ミディのコルへかけ下りる。コルへ広大な斜面をクレバスをさけつつ急ぐが、

降りつもつたアラレが足元からザラザラすべり出し気持悪いこと、この上もない。

山を登ることは、前述のようにたいしたことば出来なかつたが、それ以上に、喜び急にすませ帰日することが出来た。

山を登ることは、前述のようにたいしたことば出来なかつたが、それ以上に、喜びの絶頂から悲しみのどん底までのいろいろな体験をした。特にいろいろな人と付合つた記憶は何にも増して強い印象を残している。君島氏のことはいうまでもなく、その後まもなく遭難死したテレイのこと、フランス校長やフレンド氏、それにレビューフア。

そして、学校の仲間達、特にイギリスのト

雪がくさって全く歩きにくいヴケレ・ブランシエをトボトボ歩き、やっと夕暮れの八時近くなって、エギュード・ミディの廃棄された

その後、君島氏はフレート・デ・シャルモの岩場で転落、不慮の死をとげられた。

その時の事情については、別の所に書いた

し、今回は省略するが、この余りにも悲し

く、呪わしい運命のいたずらに、ぼくは大きな衝撃を受け、一時全くボーゼンとして

為すところを知らなかつた。だが、学校の仲間や関係者、特に前校長で日本にも来た

ことのあるエドワール・フレンド氏等の温

い援助のお陰で、やるべきことはすべて早

く、呪わしい運命のいたずらに、ぼくは大きな衝撃を受け、一時全くボーゼンとして

為すところを知らなかつた。だが、学校の仲間や関係者、特に前校長で日本にも来た</p

カラコルム遠征先遣隊報告・その1

丸子博之

目次

- 一、はじめに
- 二、カラチにて……現地交換
- 三、中央アジアの都……カブール
- 四、パンシールに沿つて……キヤラバン
- 五、高所キャンプ設営
- 六、ミール・サミール登頂
- 七、帰路
- 八、バーミアンへ
- 九、印パ戦争
- 十、サラーム・アフガン
- 十一、装備、食品、薬品等について
- 十二、むすび

針葉樹会の皆様には帰国後挨拶状を差上げたのみで、今迄まとった報告も出しておらず常に心若しく感じていたが、こゝに一まず簡単作ら報告させていただくことになり、肩の荷を半分ばかりおろした気持である。

本隊カラコム入山許可交渉の方は、在パ大使館、三井物産の方々の格別な御協力を得て順調に進んだが、残念ながら印パ紛争悪化の為挫折の止む無きに至つた。

しかし、一橋としてカラコルム遠征を計画、入山許可交渉を現地で体験したのは初

今年も遠征隊の登頂の便りがぼつぼつ聞かれる頃となつた。

昨年七月末、先遣隊として我々三名が派遣されてからも早くも一年になろうとしている。

めてであり、いざれ本隊派遣が実現する時は、いささかなりともお役に立つことがあるうと信じている。

ヒンズークシ 登山は初めの計画にはなかつた。出来れば本隊の目指す、マルビティン峰偵察をするつもりでいたが、どうしても許可の見込みがたず、あきらめてワハン谷を狙つたが、これも現地で簡単にはねられ、結局中央ヒンズークシへ入つた。

丁度時期もよくほとんど連日好天、また幸運にも恵まれ、八月二十六日ミール・サミール峰全員登頂に成功した。

今回の遠征は極力軽装備とした。靴、服装等は全て普段日本の山で使っているものをそのまま使用、テント二張は新調したが、羽毛服はあちこちから借りた。上はマナスル、下はアラスカなどというスタイルが出来上つた。佐藤はアンデス遠征の際のカビのはえかゝった高所服を、一橋講堂地下から引張り出してクリーニングに出したら立派に使えた。

先遣隊もあり、借りられるものは借りて極力経費節減を計つたが、やはり小規模とはいえ遠征ともなれば、金がかゝるし準備に相当な労力を必要とする。

とにかく任務を終え、三名無事に帰国出来

たのは針葉樹会の皆様、学生諸君並びに外部の多数の方々の暖かい好意と援助協力のお陰である。こゝに改めて厚く御礼申し上げる次第です。

おかしな話だが、三人と一緒に山に登つたのは今回が初めてである。

年が数年づつ離れてるので、在学中ザイールを結ぶ機会はなかつたし、出発前にトレンディングに行くという計画も、準備に追われてとうとう実現せずに終つた。

しかし隊の雰囲気は終始非常になごやかであつた。山におけるお互いの技術に対する信頼も強かつた。

海外遠征においては、異なつた環境での気持の高ぶりから感情の波の波長が短かく、振幅は大きくなりやすい。時には波と波とがぶつからてしまふことをもあろう。事実、些細な事から感情的な軋轢を生じ、隊が分裂したという話もしばしば耳にする。

三人と云うどちらかと云えばまとまりにくいいパーセィーが、最後迄和氣あいあい裡に遠征を終えることが出来たのは、隊長の人柄もさることながら、一橋山岳部という豊かな土壤に育まれた者の持つ強い連帯感によるもの

ではなかつたろうか。

針葉樹会の某君に云わせると、三人は揃いも揃つて格外品だそ�である。平たく云えばあまりまともではないと云うことになる。甘利隊長は先刻御承知の通り。三人揃つて身体には自身があるが、ズボラで気がきかない。金勘定は最も苦手である。いろいろ行き届かぬ点が多かつたと思うが御容赦願いたい。

通勤の電車の中、ビヤホールでの一時、ふとアフガンを思い出すことがある。

すでに遠い世界となつてしまつたが、中央アジアの荒原たる砂漠と岩山、ポプラがさわやかにゆれる高原都市カブール、精悍なヌリスタンの村人達、そして歴史の刻み込まれたバーミアンの桃源郷。いずれも昨日の事のように記憶に鮮やかである。

世界は確かに狭くなつた。キスリング一人つかつて夕方東京を立てば、翌早朝カラチ、直ちに乗りついで午前十一時過ぎにはカブールに着く。予めジープを手配しておけば、その日のうちにヒンズークシのふところに入る。翌日には四千米のベース・キャンプで氷河の水に喉をうるおすことも可能である。

機会があれば是非もう一度訪れてみたい

と思うのである。

二、カラチにて……現地交渉……

7.2

早朝四時十分カラチ空港着。丁度モンスーンの時期なので想像していた程暑くはない。

三井物産の関口氏が、迎えてくれた。同氏が税関の中迄入ってくれたので、通関は極めて簡単、貨幣の申告のみで外へ出る。

関口氏宅迄車での三十分。熱帯の夜明け。次第に暑くなる。カラスが多い。関口氏のパンガロー（ここでは住宅をパンガローと呼ぶが、日本のある山にある塹立小屋と違つて大邸宅である。）を空港に忘れたことに気がつく。関口氏に又御足労願つて取りに戻る。運よく見つかったが、最初からこんな調子では先が思いやられる。

一眼りしてから、大使館書記官牧内氏宅及び日本航空小倉氏訪問あいさつ。

夕方三人でカラチの銀座通りとも云うべきエルインストン通りをぶらつく。ラクダの荷車が通る。熱帯樹の並木。日本人とみるとポン引き

が寄つてくる。道端でカバーブの一種を売つ

ている。現地食に慣れる為に今のうちから何でも食つておいた方がよい。ひき肉とねぎ、

うどん粉をこねてセンペイのように平たく丸くのばし、フライパンで焼いてその上に玉ねぎのみじん切りをのせる迄はよいが、さらさ

にその上に、草色の得体の知れないどろどろしたものをかけて一ヶニアンナ也（約九円）。まず丸子から試食したが結構いける。但し辛いのには閉口する。

夜、三井物産所長の吉原氏邸にてパーティ。吉原御夫妻に妙齡のお嬢さん、三井の小塩、関口両氏、牧内御夫妻。食後、レコードを楽しむ。

お嬢さんの指導でモンキー・ダンスとやらを試みたが、甘利隊長はどうみても中年ぶとりのゴリラであった。

甘利・佐藤は吉原邸泊。丸子に関口氏邸にお世話になる。

千葉岳連隊に会う。チトラールへ入つた由で、来年ティリチミールを目指すと云う。一人はこのままカラチへ居すわつて、カラチ大学で約一年ウルドウ語を勉強すると云つていた。元気な連中だ。

帰路、日本航空へ寄り小倉氏からキンヤン・キッシュの許可取付交渉の模様を

くわしく聞く。非常に参考になった。

午后一橋の先輩である丸紅・中村氏、東綿・奥所長にあいさつ。

十時半牧内、関口両氏と共に国防省へ。担当官アブドラ大佐に合う。重厚な建物の一室。やゝ暗い。壁に一間四方もある。そうカラコルム全域地図がかけてある。その下に、今年入山許可された隊のカードが横に一列にピンでとめてある。

右の二つが東大のキンヤン・キッシュと京都府連のディラン。大佐はなかなかの達大夫で、折目正しいかにも高級軍人らしい風格がある。お茶を飲みながら話を進める。驚いたことに三月に在日パキスタン大使館に提出した我々のアプリケーションが、まだ廻ってきていない。写を一部渡し、格別の配慮方をお願いする。国防上特に問題起らなければ期待にそ

7.23

ようべストを尽すという返事。勿論すぐに許可しようと思ふ答は出るはずがないがかな

希望がもてる。来年一橋の名が地図の上にることを心から祈りながら、四十分の会談を終えた。

次いで外務省へ。担当官カユーム氏。元北京にて最近アジア担当課長となつた。ここにも同様何の書類も來ていない。写を渡す。

お茶とビスケットが出る。牧内氏の話では、先程の国防省のお茶と云い、異例なことの由。

夙過ぎ迄山の話をして辞す。

直ちに東京中島君宅出電。午后から今後の行動につき打合せる。

一九六五年度遠征隊は東大隊を最後として拒否されたが（東大隊もきわどいところだつたのは新聞等の報道で御存知の通り）、その理由としては、主として問題の地域に外国人がウロチヨロされてはかなぬ。又大半は将校をリエゾン・オフィサーとしてとられるのはもつたないといふ点にある。

我々の出発前に在日パキスタン大使館より一等書記官の名で、政治的理由により当分の間、入山許可出来ない旨の告紙をもらつたが、こちらではそのような雰囲気は全くない。

今後の交渉次第では可能性充分ある。牧内

関口兩氏の観側も希望的である。ともかくひ

とまずカラチでのあいさつは終つたので、予

て相談、こちらの方は問題ない。

定通り山へ向い出来るだけ早く登頂をすませて、九月十日頃には牧内氏とラワルピンディ

で落合い腰をすえて国防省、カシミール省にあたり、再びカラチへ戻つて工作することに足先に朝六時、カラチを発つ。

午前中大使館。毎朝大使館へ行くのが日課となつた。遠征事務をスムースに運ぶ為には、大使館の力が大きい。マゴール氏の話では通関にはあと二、三日はかかる由。

カーブル迄の空輸について、まずP.I.

Aにあたると梱包が大きすぎて乗らない。

アリアナ・アフガン（アフガニスタン航空）は貨客用機に乗ると云うが、毎週水曜日のみ運航、八月四日迄待つことになる。

当初の予定では、七月二十九日にはカブルへ荷物が着くつもりでいたが、やはり少しづつ遅れるものだ。

トランシット扱いにするのに若干日数がかかりと云う。「カラチ経由カブール行」としておけば極めて簡単なのだが……こんなことで貴重な日を失うのはもつたないが止むを得ない。

アフブン大使館に寄り、荷物の積込につい

7・27

7・25

7・26

丸紅・山崎所長のお招きにあずかりアラビア海で海水浴。風が強く鉛色の波が荒い。

今日我々の荷物を積んだヴェトナム号が方

ラチへ入港。

7・30

7・31

若干食糧購入、パンは安いがチーズ、しょ
う油等輸入品はさすがに高い。カブール滞在
用にしよう油も一びん買う。

丸子明日カブールへ向う。

(以下次号)

大使館で、荷物通関が今日中に終ると聞いて安心する。マゴール氏はアリアナの水曜の便も予約しておいてくれた。佐藤は荷物と一緒に飛ぶことにし、アリアナへ予約に行く。ところが佐藤の切符に手違いが発見され、東京へ照会するというので、又待たされる。

8・1

牧内氏の坊やをつれてペールへ2度目の水泳。今日は日曜日なので、東綿、伊藤忠の家族の人達の姿もみえる。

午前中、吉原邸へ、甘利隊長より電話が入った。こちらの事情を知らせる為、夕食後吉原邸よりカブールへ電話を申し込んだが、夜十一時過ぎるとついに出す。



こういう事は書き出すとキリがないし、紙数も大巾に超過しているので、ここらで止めにするが、どうも急いで端折って書いたので書き足りぬ思ひですつきりしない気持である。

△時間記録▽
七月一三日(晴)。シャモニト(二四・三〇)
ミディ駅(一五・〇〇) フルシェ
避難小屋(一八・三〇)
七月一四日(晴後曇)。小屋(六・〇〇)
・ ジャンダルム下(八・〇〇) 主稜線
(一五・〇〇) ミディの小屋跡(二〇・〇〇)
七月一五日(晴)。小屋跡(六・〇〇)
ミディ駅(七・〇〇) シャモニー。

佐藤の切符が再発行された。予約もすませた。アリアナのマネージャー・ディスタギルザーダ氏が非常に親身になつて世話してくれて、同氏に荷物の件を再度頼む。

8・2

(14頁より続く)
(どちらも彼が登った)の話をしたことは忘れない。スウェーテンのロベルトは良い友達だった。彼の相棒はミディの南峰で怪我をしたが助かつた。

それから、シャモニで会ってお互になぐさめあつたM・C・Cの松島利夫君(彼の相棒もモンブランで遭難した)とはその後も時々会つてゐる。

懇親山行のお知らせ

千代田区丸ノ内、古河総合ビル内

富士通信K・K・システム部システム課

(電話二一六一三二一一)

小島和人

(山行担当幹事)

本年度山行予定を次の通り定めましたのでお知らせします。

九月（十五～十八日）、南アルプス北岳。

十一月（三日前後）、奥秩父。詳細未定。

十一月（二十三日前後）、富士山

一月（一～七日）、北岳バットレス合宿。

二月（十二日）、懇親スキー・那須北温

泉より三本槍ヘッパー。

三月（三十一日前後）、黒部湖より立山

東面スキー。

五月（連休）、今の所、はっきり決めて

居ませんが、後立山の予定。

尚、会報前号でお知らせしました七月の東北の山は、準備不足につき中止させて頂きましたので御了承下さい。次回より必ず手違いのないように致します。

参加希望の方はなるべく早目に左記へ連絡願います。

会費納入のお願い

山本尚禎

(会計担当幹事)

◆一九六六年度針葉樹会費は次のとおりです。

(年額)

昭和三十一年以前の卒業者 二〇〇〇円

昭和三十二年以後の卒業者 一五〇〇円

編集後記 今回もどうやら予定通り発行することが出来た。多忙中、時間をさいて原稿をお寄せ下さった方々の御協力のお陰である。原稿依頼するも今回執筆頂けなかつた方々には次回ぜひ御登場していただきたいものです。

ミールサミール遠征記は、別冊にして夏季特別号としたかったのですが、丸子さんの希望により今後数回連載していくことにしました。今後、山行の紀行文のみでなく、日常の生活のもよなどもどしどし載せていくことにしました。この方面でも御協力お願いします。

(倉知)

◆会費の納入

① 現金で送金される場合（現金書留）

千代田区丸ノ内二の八 古河ビル

富士通信機製造（株）

経理部会計課

山本尚禎

宛御送金願います。

② 銀行振込される場合

協和銀行丸ノ内支店に「針葉樹会（山

本 尚 禎」の普通預金口座に御振込下さい。

尚、協和銀行の各支店よりの振込は無料。他銀行よりの振込は手数料五〇円ですからお含みおき下さい。

未納会費の納入

昨年の納入率は五一%ときわめて低率でした。会計担当幹事より個別に連絡しますので、前年度未納の方は何卒二年分御納入下さる様、お願ひ申し上げます。

小島和人迄
(以上)

小島和人

(以上)



モンブラン・ボソン氷河

— 倉知 敬 撮影

カラチの街を行く女性

— 丸子 博之 撮影



